

よみさんぼ

大宮見沼

第16号

写真家 野口勝宏

やどかりの里発！ 地域発見マガジン

特集

自然栽培に学ぶこと



特集

自然栽培に学ぶこと



自然栽培に取り組むやどかりの里の農福連携事業

私は昨年（2015年）の1月から、本紙の編集会議と見沼プロジェクト（やどかりの里の新たな取り組みを話し合い、具体化を考えるプロジェクト）の会議に参加しています。今まで図書館で働いた経験しかありませんから、会議で話し合われることのすべてが新鮮で興味深いものでした。中でも、毎回のように議題に上る「農業」のことは、全体像はわかっていなくても、楽しそうでいつもわくわくしながら聞いていました。それが「農福連携事業」という、やどかりの里の事業の1つだとわかったのは、実はまだ最近のことなのです。

いまだこの事業が、具体的にどんなことをして、何を目指しているのか、知らないことばかり。そこで、この事業を中心的に担っているやどかり情報館の宗野政美さんにお話を伺いました。

農福連携事業

やどかりの里には、出版・印刷事業を行うやどかり情報館や、ハンドメイド製品を作製するすてあーず、お弁当をつくるエンジュなど、いろいろな働く場があります。農福連携事業は、新たな就労の場をつくろうというものです。

見沼区の耕作放棄地をお借りして、昨年（2015年）4月から始まったこの事業。ネギ、大豆、ポップコーン、サツマイモなど39品種もの野菜が収穫できました。収穫した作物はそのまま販売するだけでなく、乾燥したり加工したりと、付加価値のある製品として販売する方向を目指しているそうです。

自然栽培による農

この事業は「自然栽培」法という農法で行います。「有機農法のこと？」と思われるがちですが、「自然栽培は、農薬や化学肥料はもちろん、有機肥料も

たいひ
堆肥も使いません。土が持っている偉力，種が本来持っている生命力，それに太陽の熱や光，水などの自然の恵みだけで植物を育てるんです」と宗野さんは生き生きと語ってくれました。

種は記憶する

さらに、もう1つ大事なこととして「自家採種」というものを教わりました。これは、育てた作物から種をとり、翌年はその種をまいて育て、またその種をとって翌年育てる……と毎年繰り返していく方法です。「それって普通じゃない」と思えますが、現在ではこのように自家採種している農家は、ごく少数派になってしまいました。自分でとった種（固定種・在来種）を使うと、形や大きさの揃った作物ができにくいので商品価値が下がるし、収穫時期もバラバラなので大量生産に向かないのだそうです。

そこで、多くの農家はF1種（交配種・一代雑種）と呼ばれる種を買って使うようになりました。F1種は違う品種を人為的に交配させて作るので、1年目は形の揃った良い作物が一斉に収穫できますが、種がとれなかったり（雄性不稔）、とれても翌年は同じようにはできません。農家は毎年種を買うことになり、全国どこへ行っても同じような野菜ばかりになってしまったのです。

一方固定種は、他の土地から持ってきた種でも、毎年種をとってまいていくということをくり返すうちに、そこの土壤に合った固有の作物になるのだそうです。種には土を記憶する力があると言われる所以です。

どちらの種にも長所はありますが、やどかりの里では、固定種をまいて育て、種どりをして翌年その種をまく、という自然のサイクルに沿った農業に取り組むことにしたのです。

草にも虫にも役割

草や虫は、雑草とか害虫とか言われ、やっかいものとされてきました。たし



かに、作物を全滅させてしまうような深刻な被害がでることもあります。でも、人間にとっては雑草や害虫であっても、草も虫も、自然界全体をバランスのとれた状態に保つため、それぞれ役割を担っているのだそうです。

「自然界にある、すべてのいのちの力を発揮させる」という自然栽培の考え方は、やどかりの里の考えと相通ずるものがあるのではないかと感じました。

悪戦苦闘

とは言っても、全く放っておくわけではありません。放りっぱなしでは、作物は草や虫に負けてしまいますし、草の種がとんで周囲の農家に迷惑をかけてしまいます。草や野菜の声を聞きながら、状態を見ながらの、適切な除草は必要です。

それにしても、夏の草の勢いといったら！ほんの少し目を離すと、畑中が草だらけになってしまいます。宗野さんは「1年目の夏は、暑さと草との闘い。そして、涼しくなったと思ったら長雨。畑に入ることすらできず、水はけのよくない畑では、小松菜などの葉物がすっかりだめになってしまいました。この畑は来年から里芋にしようと思っただけです」と話してくれました。

収穫の喜び

まだまだ収益に結びつくほどではありませんが、収穫もありました。しかし、採れたての安納芋を配ったら「甘くない」と不評。宗野さんたちは、少し寝かさないで甘くならないことを知らなかったのです。この段階でも学ぶことが多々ありました。大豆はたくさん採れたので、脱穀して味噌づくりに挑戦しようと思っただけとか。

農業は辛い作業を伴いますが、「こんなふうには、自分でまいた種が育つのを見る楽しさや、育てた作物を収穫する喜びがある」と宗野さんは言います。

また、自然のサイクルに合わせて、年単位で動いていく農の時間の流れを知ったのも得難い体験だったそうです。

未来に向けて、楽しんで

宗野さんには「畑の休憩スペースにハンモックカフェをつくりたい」「大豆から味噌だけでなく豆腐や納豆もつくろう」「やどかりの里の野菜だけでなく、

地域の農家で出荷できない不揃いの野菜も、乾燥するなど加工して商品化できるようにしよう」……などなど未来の夢がたくさん。「まだまだこれからですが、食べる人においしいと喜んでもらえる野菜を作っていかれたら……」と目を輝かせます。



トラクターを操作する宗野さん

最後に「自然栽培に共感する人、販売を考える人、固定種を売る人、それぞれの渦が『農のある暮らし』をテーマに、ゆるやかな連帯の輪になりつつあります。農福連携事業では、地域の人たちをはじめ、こうした人たちとのつながりを大切にして、メンバーが楽しんでできる農業を目指しています」と抱負を語ってくれました。

取材を終えて

米づくりは一生やっても、生涯に40回くらいしか作れないと聞いたことがあります。お話を伺っていて、改めて、農業は1年に1度ずつしか経験できないものだと気づかされました。

私には農業の経験はありませんが、周囲の木や花を見るにつけ「人間は植物にはかなわないなあ」と漠然と感じてきました。自然栽培の考え方は、そんな自然への畏怖の気持ちを思い起こさせてくれます。

目先の安さ、便利さなどに心を奪われ、その恩恵を受けてきたことへの後ろめたさを感じてもいたので、やどかりの里で始めた農業や、自然栽培には共感するところがたくさんありました。

現実的には、いろいろな困難があるでしょう。短い期間で結果を求めず、息長く続けていていただきたいと思います。自然相手の仕事は大変なことも多いけれど、野外ならではの心地よさがあります。仕事に携わる中で、自然の心地よさと、「育てる」「収穫する」という農業ならではの喜びに、たくさん出会って欲しいと思いました。

(記 並木せつ子)

やどかりの里の仲間たち・15

いのちをつなぐ自然栽培



明石 誠一さん（明石農園）

やどかりの里が始めた自然栽培の水先案内人が明石誠一さんです。明石さんは埼玉県の三芳町で新規就農して14年目、合わせて1町9反（19,000㎡）にもなる10か所の畑、サッカーグラウンド2コート以上の土地を借り自然栽培の農業に従事しています。宇宙飛行士が夢だった明石青年は、大学卒業後ワーキングホリデーでカナダに行ったり帰国後は働きながら資金を貯め、農業に取り組み始めたのです。鎌と鋤^{くわ}を借りて開墾し、少しずつ畑を広げていきました。

明石さんは「枯葉を虫や微生物が食べてうんちになり、それが積み重なって土ができ、二酸化炭素と水と光合成で植物は大きくなるという自然の循環を大切にしたいのが自然栽培なのです。肥料を使わなくても小麦や大豆を栽培することで、微生物が多くなるのです」と楽しそうに話します。そして「生業^{なりわい}としての農業、一方で土に触れ合って自然の中で癒されていくという両方の側面を大切にしたい」とも言い、やどかりの里で始めた農福連携事業にもこの両方の視点が大切だと指摘します。

もう1つ大事なポイントは「種」。「形のいい大根を選んで別の畑に植え替えると、春になると茎が伸びて花が咲き、種がつく。大根は種を残したくて生きているので、僕らが種を取って次の世代にパスしていくのです」そして「土の中に多様な微生物がいることで野菜は病気にかかりにくい。種や土の世界も多様であることが大事。自然栽培には害虫や雑草は存在しない、必要ない生き物は自然の中にはいない、それは人の社会と全く同じです」と語っていただきました。

明石さんのお話を聞いていると、ワクワクします。そして、やどかりの里の畑で採れた野菜たちが何とも愛おしく、大切にも思えるのです。ぜひ一度、御蔵や上野田の畑に足を運んでみませんか。（記 増田 一世）



よみせんぽ 日誌

地域をつなぐミニコンサート

12月13日(日)、サポートステーションやどかり(見沼区中川)で、やどかりの里クリスマスミニコンサート「小さな小さな音楽会～61のハンドベルが織りなすハーモニー」を開催し、一足先にクリスマス気分を味わいました。

やどかりの里では数年前からコーラス隊を結成し、音楽活動を行っています。活動を通して、誰もが楽しめる音楽には、その時を共有することで一体感を生み出す力があると実感しました。そこで、小規模ながらも参加者みんなで楽しめる、そして、やどかりの里と地域がつながるコンサートをと企画したのです。

ハンドベルを演奏してくれたのは、東京都杉並区の教会を中心に活動する「Schloss(シュロス)」の皆さん、総勢11名。子どものごぶし大の小さなベルから5kgもある大きなベルまで、61個のハンドベルを用いてクリスマスにちなんだ曲を演奏してくれました。目をつぶれば、そこには雪景色が広がっているかのように思える素敵な演奏で、感動の連続。ハンドベルと言えば、静かな演奏をイメージしていましたが、大きなベルは体力勝負! 全身を使い、汗だくになりながらの演奏に、耳や心はもちろん、目も釘付けになりました。

同時開催したクリスマスカードづくりはすてあーず、やどかりテラスの石窯をつかった本格ピザはルポーズ、お土産のケーキとクッキーはエンジュ……とやどかりの里の事業所も参加してくれ、楽しい1日になりました。

中川地域にお住まいの皆さんに向けたコンサートは、初の試み。近隣の皆さんは来てくださるのだろうか……当日も心配でそわそわしていましたが、中川自治会長、役員の方、近隣にお住まいのご家族が来場くださり、本当にうれしくて、うれしくて。音楽を通じて、やどかりの里を陰に日向にと支えてくださる地域の皆さんといっしょに楽しめる企画を、これからも考えていきたいと思っています。次回開催する際には、もっと多くの皆さんと出会えることを楽しみにしています。中川自治会の皆さま、ご協力いただきましてありがとうございました!

(記 宗野 文)

あの街
この街

俊一郎が行く・10

教会で過ごすクリスマス

それぞれの場所にある均衡

建築の仕事をしていて楽しいなと思うのは、仕事を通して人や場所に深くかかわり、歴史を知ることができる時です。もちろん、それが同時に苦しみになったりもします。建物があることで、一度はその場所につくられた均衡。その均衡を壊して、新たなものをつくるのが私の仕事ですが、新たにつくるものがもともと存在したものと同じような環境をつくり出せるのか？ 果たして、不協和音を生み出さないのか？ そんな不安を感じることも少なくありません。

気がつかなかった教会

主要幹線道路の沿道建物の耐震性を調査するために訪れたのは、教会でした。私が暮らす区内ですが、大通りに面したその教会の存在に気がついたのは、その時が初めてでした。鉄骨4階建て、ビルのような形の建物の上にはかわいらしい尖塔型の屋根がかかり、その上には建物の大きさからは控えめな十字架が掲げられていました。調査の結果、残念なことに耐震性に劣ることがわかりました。また、尖塔部分は道路の中心からの距離よりも高いため、耐震補強をするか建物を解体するかの判断が必要という結果に。しかし、十分な耐震補強を行うには予算が心もとないというのが現状でした。

意匠に秘められたストーリー

教会が建っている場所は、建物に耐火性能を要求される場所でした。耐震補強改修の他にも、耐火性能の要求が発生しない小規模の建物を2棟建てて極力工事費を抑える案、旅行者向けの簡易宿泊所を併設して借入と返済の可能性を探るなどいくつかの案をつくりましたが、障害となったのは今の建物の解体費でした。やむを得ず選択したのは、耐震基準としては不十分ですが、大きな地震を受けても倒壊せず、人命の保護ができる最小限の補強と道路の中心までの距離よりも高い尖塔部分の撤去を行う改修でした。しかし、そこは古い建物の

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）



改修。蓋を開ければ想定外の部分もありましたが、金額の目処はつききました。
厳しい予算の中でも、みんなが触れることがなかった改修部分があります。それは撤去した尖塔とその上に掲げられていた十字架に代わる意匠でした。高所に十字架を掲げない代わりに大きな十字架を設け、背後から明かりで照らします。それは街を照らす明かりともなって、人々の往来を見守るのです。そんなささやかなストーリーを秘めて用意した意匠は維持しつつ、改修工事に入りました。

クリスマスの夜

工事前のクリスマス、教会に来る人たちの様子や建物の使い勝手を知りたくて、礼拝に参加しました。3階まで階段で登るしかない礼拝堂を、一生懸命に登るおじいちゃんやおばあちゃんの姿がありました。代々通い続けている一家もあり、みんなで子どもたちの成長を見守る光景もありました。そこは、厳粛さよりもむしろ温かな雰囲気にあふれていました。このコミュニティをこの場所で続けられるようにすることに、使命感を感じながら過ごしました。

工事中、工事完了後と3回のクリスマスが来ました。初めは照れてほとんど声が出せなかった讃美歌も、今では大きな声で歌えるようになりました。歌うことで讃美歌の歌詞がもつストーリーを噛み締めます。苦しい時もあるかもしれないけれど、現状を慈しみながら過ごそうという普遍的な価値観がありました。これからも、この場所に生まれた新たな均衡を見守り続けたいと思います。



写真 新 良太

あなたの街のやどかりさん

やどかりの里あゆみ舎

1人1人の力が光る働く場

身近な地域の企業に貢献したい

現在あゆみ舎では、採尿キット作成、ダイレクトメール・会報等の封入封緘^{かん}、医療機器パーツ作成といった軽作業だけではなく、メール便配達のように体力を要する仕事も請け負っています。

あゆみ舎では身近な地域の企業に貢献すること、そして自分たちが役に立っていることを実感できる仕事を大切にしています。請け負う業務はいずれも機械化が困難なために、手作業に頼らざるを得ない作業です。定型で繰り返し行う作業は安心して取り組むことができますが、集中力が問われます。請け負う数が大きくても作業の質や効率を維持・向上させるために、作業に関する学習会も定期的に開催しています。

パソコンリサイクルに取り組み始めました

昨年（2015年）から、不要になったパソコンの解体・分別作業を導入しました。パソコンの適切なリサイクルは、希少金属の再資源化や廃棄物削減につな



チームワークよく採尿キットを作成中

がります。作業スペースは限られていますが、携わっている8人のメンバーで月に合計700kgのパソコンを解体・分別することができるようになりました。どこにネジがあるのか、どこから外すことができるのか、この金属は鉄かアルミニウムかなど、試行錯誤をしながら作業を進めていきます。こうした作業はやりがいがあり、「おもし

第 15 回

あゆみ舎は「一般就労したい」と願う精神障害のあるメンバーの声から、1992（平成4）年2月に天沼町で活動を開始しました。集団アルバイトや企業実習などを行ってきましたが、就職しても戻ってくる人が多く、その人たちの働く場となり、同時に就労準備のために軽作業に取り組むようになりました。現在は大宮区堀の内町で、企業からの作業請負をしています。

ろい」「この仕事をしたい」とあゆみ舎の利用を希望する人が増えてきました。そして、身近な地域のパソコンリサイクルに貢献しようと、不要になったパソコンの回収事業にも取り組むことになりました（巻末のインフォメーションをご参照ください）。地域とのつながりの一歩として取り組んでいきたいと考えています。ご不要になったパソコンがございましたら、是非お声掛けを下さい!!

1人1人が活かされる働く場を目指して

現在あゆみ舎で働くメンバーは48人。年齢は20代～70代と幅広く、利用する目的もさまざまです。あゆみ舎で働くことで就労への準備が整い一般就労を目指す人もいれば、「あゆみ舎といっしょに年を取っていきたい」と話してくれる人、苦手だった他者との関係性を築き直す人もいます。あゆみ舎という働く場が、1人1人が活躍できる場であること、そして、その人なりの成長や回復を支える場であり続けることが、あゆみ舎の大きな目標です。（記 堤 若菜）

あゆみ舎

〒330-0804

さいたま市大宮区堀の内町 1-37

一武ビル1階

Tel048-648-2555 / Fax048-648-2555



仕事を通して地域と つながる

佐藤 真理さん

(ヤマト運輸株式会社大宮御蔵支店)



あゆみ舎がヤマト運輸株式会社のメール便(現DM便)配達^{注)}を始めたのは2009(平成21)年5月。当時天沼町にあったあゆみ舎で、仕事の内容や端末の使い方について教えてくださいましたのが、佐藤真理さんです。その時からあゆみ舎の仕事ぶりを見守ってくださっています。

障害があっても働くことができる

佐藤さんはヤマト運輸で働かれて

15年。その中で体調を崩したことはほとんどないという、驚くべき体力と強い責任感をおもちの方です。そして2009年、大宮御蔵支店への異動と同時にメール便の担当となり、その数か月後にあゆみ舎がメール便配達を開始しました。

「当時は障害のある人ができるのかと思いましたが、スタッフのフォローがあるということで安心したのを覚えています。誤配が少なく、配達



注) DM 便配達の仕事内容

DM 便配達は、届いた DM 便をコースごとに仕分けるところから始まります。そして、それぞれのコースで配達先を地図に書き込み、配達する順番に DM 便を並べ替え、ヤマト運輸のベストと名札を身につけて、端末を持ったら出発です。全体で 100 ~ 200 冊程度をコース毎の担当者が配達します。一般の人と同じ仕事をしているので、一般のアルバイトの体験や実際に働く機会として、法人内の他就労支援事業所から参加している人たちもいます。

時もルールに沿って対応していて、真面目すぎるかなというくらい。障害があっても一般の人と同じ労働をしていますよね」と佐藤さん。

配達時のイレギュラーな事態への対応や、大勢いるDM便の配達者の出欠状況を把握して、休みがあればその調整も行っています。佐藤さん自身が欠席の穴を埋めることもしばしばで、大宮区のさまざまな場所で配達している姿を見かけます。「あゆみ舎は平日に穴をあけることはほぼはないため、助かっています。配達数が大幅に増える時も、あゆみ舎なら対応してくれると信頼しています」と話してくれました。

働くことの意味

あゆみ舎でDM便の担当をしているメンバーは「『配達ご苦勞様』と言われると、自分が働いていることを地域の人に認められていると感じられて嬉しい」「配達していると町のことがよくわかってくる」と話してくれます。また、室内の軽作業では集中力が続かず定着しなかったメンバーが、DM便の担当となって、退所することなく継続して働くことができています。佐藤さんにこのことを伝えると、「DM便によって働き続けている人がいることは率直に嬉し



いです。自分の仕事に意味があると改めて感じることができます。あゆみ舎の仕事ぶりは、障害があるからという視点では見ていません。取り組める人が増えたらもっとコースを増やしていけるのに、もったいない気もしています」と話してくださいました。優しい笑顔が印象的な佐藤さんですが、仕事に対するプロ意識は並々ならぬものがあります。

地域の1人として

佐藤さんのお住まいが近いこともあり、地域であゆみ舎のメンバーをよく見かけるそうです。仕事を通して知り合った人が、日頃の暮らしの中でさり気なく出会う……DM便配達を地道に続けるあゆみ舎のメンバーたちの姿が、地域の人たちに当たり前に受け止められています。

メール便を配達するメンバーたちも、仕事を通して地域のことに興味をもつようになりました。こんなさり気ない関係性が広がっていくことが、私たちの喜びでもあるのです。

(記 堤 若菜)

インフォメーション



営業時間 月～金 10.00-17.00
さいたま市大宮区天沼町 1-136-2

募集

- ☆作品展示したい方
- ☆雑貨販売したい方
- ☆貸しスペースあります

詳細は ☎ 048-657-0202



あゆみ舎が使用済み PC の回収を始めました！

不要になった PC・携帯電話・スマホを無料でご自宅へ引き取りに伺います。持ち込みも大歓迎です。データ消去作業は株式会社アンカーネットワークサービス (<http://www.anchor-net.co.jp/>) が責任をもって消去いたします。

問い合わせ先 あゆみ舎

〒 330-0804 さいたま市大宮区堀の内町 1-37-103 TEL 048-648-2555
受付時間 月～金 (祝祭日は除く) 9:00-18:00

*パートさん募集！

やどかりの里が運営しているエンジュでは、高齢者向け宅配弁当サービスを行っています。現在エンジュでは、作業補助、配達のパートさんを募集しています。(主に見沼区周辺を配達します)

<作業補助・配達>

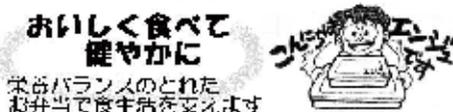
曜日/応相談, 12:30 ~ 17:30
時給 840 円

<配達>

曜日/月～金, 16:00 ~ 17:30
時給 840 円

お問い合わせは以下まで

エンジュ (見沼区南中野 286-1)
TEL 048-686-7875
(担当 永瀬恵美子)



昼食 1食 550円

月～金, 1食からお届けします！

- ※お好みや刻み食も対応します
- ※ご希望の曜日にお届けします

エンジュ TEL 686-7875

<受付> 月～金 (祝日を除く) 8:30～18:00

農作業のボランティアさん募集中！

～やどかりの里では農福連携事業を始めています～

詳しくはやどかり情報館まで

TEL048-680-1891 (担当 宗野, 木村)

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために

こうぬまふくしかい

社会福祉法人 鴻沼福祉会

こころを込めた手づくりの品をぜひ一度お試しください



いちぶ
とうふ屋 一豆

TEL 048-854-8000

FAX 048-854-3538

さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、国産・手づくりにこだわった本格とうふ。宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を100%使用し、オリジナル惣菜も人気です。大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる“小さなぜひたく”を食卓にお届けします。

きりしきのパン

TEL 048-854-6910

FAX 048-854-6942

さいたま市中央区円筒1-3-15 鴻沼福祉会館内

きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心にこだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。(一部鶏卵を除く)

この道30年の職人とともに手がけるパンは、少し懐かしい味と香りがします。



弁当屋 いちず

TEL・FAX 048-684-1257 さいたま市見沼区染谷2-145

そめや共同作業所のお弁当は旬を感じる手づくり弁当です。野菜をたくさん取り入れ、手が込んでいると女性に大人気です。

鴻沼福祉会から読者の皆様へ

○鴻沼福祉会では、袋詰め・部品組み立て作業や清掃作業、資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な仕事を受注しています。働くことをおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを探求して新しい仕事にもチャレンジしつづけています。

○障害のある人たちの就労支援、生活支援、相談支援のスタッフを募集しています！ 問い合わせ先：048-854-6890 (担当オガワ)

鴻沼福祉会事業所一覧

●本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円筒1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL:048-854-6890 FAX:048-856-0313

《はたらく》●つばさ共同作業所(中央区) ●あざみ共同作業所(見沼区) ●そめや共同作業所(見沼区) ●きりしき共同作業所(中央区)

●さいたま障害者労働センター(楊川市)

《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえてホーム ●かりんホーム ●よつばハイツ

●なつめホーム(以上、中央区) ●のぞみホーム(見沼区)

《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢(以上、中央区)

●見沼区障害者生活支援センター来人(見沼区)

よみさんぽ

作者紹介

写真家 野口勝宏さん

のぐちかつひろ／写真家、福島県在住。
「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と「福島の花」シリーズを制作。開催中の福島県観光キャンペーン「福が満開、福のしま」においては前年に続いてJR東日本のメインイメージに起用され、ポスターや駅構内装飾・ラッピング車両を花で彩る。福島空港においてもANA全日空カウンターや搭乗橋、到着ロビーを花の写真作品で彩っている。著書に「ここは花の島」などがある。Nikon Photo Contest 2014-2015写真部門では、グランプリを受賞。「福島の花」シリーズは<http://noguchi.photo>にて閲覧可能。Facebookは「福島の花」「野口勝宏」で公開中。

表紙：花 白梅とアカメヤナギ

今日咲いたことにはそれぞれに小さな理由がある。

春の風は蕾でいた長い時間をねぎらい、とどまらずに歩くことをうながしている。

題字 宗野文さん

学生時代から書道が大好きで、子育て中の今、我が子とともに習字に再挑戦中。やどかりの里の作業所「すてあーず」所長。見沼区南中丸在住。

大宮見沼よみさんぽ 第16号

発行 2016年1月（冬号）

編集 「大宮見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。

「大宮見沼よみさんぽ」編集委員一同